中国ＥＶ、技術が競争軸に

広州モーターショー開幕

航続1000キロやＩＴ連携

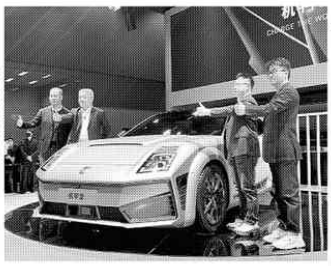
中国勢の電気自動車（ＥＶ）技術が一段と進化している。19日に広東省広州市で開幕した「広州国際汽車展覧会（広州モーターショー）」では、地場大手の広州汽車集団が充電1回あたりの航続距離で1000キロメートル超の新型車を発表した。中国では50万円前後の低価格車が地方で需要を広げてきたが、都市部を中心に高価格帯での競争軸は価格だけでなく航続距離や自動運転など技術面にも移りつつある。

広州モーターショーは毎年秋開催で、今年は28日まで実施する。会場には約1千台が展示され、ＥＶを中心とする新エネルギー車で200台超を占めた。北京市や上海市で開かれるモーターショーより小規模だが、翌年の中国市場を占う上で注目を集める。

展示では現地勢の技術革新が目を引いた。広州汽車が2022年1月の発売を予定するＥＶの独自ブランド車「ＡＩＯＮ ＬＸ Ｐｌｕｓ」は、量産車として「世界最長」の航続距離を実現したという。同社の既存ＥＶ「ＡＩＯＮ ＬＸ」の520～650キロメートルから大幅に向上し、中国の高級ＥＶと比較しても異例の航続距離の長さだ。

競合他社の中には「電池を多く積めば『1000キロ』は実現できない技術ではない」との声もあるが、広州汽車は独自に開発した「スポンジシリコン正負極材」と呼ぶ材料を使い、電池全体の体積や重量を減らしてエネルギー密度を高めたことで、航続距離の向上につなげた。

広州汽車集団の「ＡＩＯＮ」は充電１回あたりの航続距離で1000キロメートル超をうたう


長城汽車の高級ブランド「沙竜」は初のＥＶ「機甲竜」を発表した

北京汽車集団系の極狐（アークフォックス）は、華為技術の部品やソフトを組み込んだ新ＥＶを披露した

10分充電で400キロ

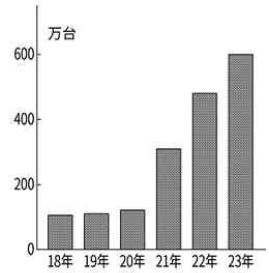
民営大手の長城汽車が発表した、高級ブランド「沙竜」で初のＥＶ「機甲竜」は「1回の充電で800キロメートル余りの航続距離を実現しただけでなく、わずか10分間の充電で400キロを超える」と、ブランドのトップである文飛氏は胸を張る。価格は48万8000元（約870万円）で、高性能レーダーや高感度カメラなど38のセンサーも搭載した高級路線で「トップシェアを狙う」（文氏）。

航続距離以外ではＩＴ（情報技術）分野の企業との連携も目立った。北京汽車集団系のＥＶブランド、極狐（アークフォックス）は高級セダン「アルファＳ」で、中国の通信機器最大手、華為技術（ファーウェイ）の部品やソフトを組み込んだモデルを披露した。停止状態から時速100キロまで3秒半で加速できる。

中国のＥＶなど新エネ車の販売台数は、11年は1万台にも満たなかったが、20年には137万台に達した。21年は1～10月累計で前年同期比2・8倍の254万台となり、通年では300万台を超える可能性が高い。1～10月の新車全体に占める比率は12％に達し、前年同期の5％から急拡大している。

大都市では渋滞を緩和するためにナンバープレートの発給が制限されており、ガソリン車よりも制限が緩い新エネ車を選ぶ消費者が多いほか、米テスラが21年から出荷を始めた中国産のＥＶが人気を集めたのもきっかけに需要が盛り上がった。地方都市では上汽通用五菱汽車が20年に発売した「宏光ＭＩＮＩ ＥＶ」を中心に、50万円前後の格安ＥＶの需要が伸び続けている。

中国政府は新車販売にとめるＥＶなど新エネ車の比率を25年に20％前後まで高める方針だが、前倒しで達成する可能性が出てきた。投資銀行の中国国際金融（ＣＩＣＣ）は、乗用車の新車販売に占める比率は25年に30％になると予測する。低価格帯が市場を広げながら、高級価格帯でも技術などで競う構図が広がりつつある。



（注）乗用車、21年以降は予測
（出所）英LMCオートモーティブ

調査会社フォーイン（名古屋市）の周錦程・中国調査部部長は「中国メーカーのＥＶは価格だけではなく、ＡＩ（人工知能）スピーカーを通じた操作や自動運転などの先進技術が強みだ。実際、低価格帯だけではなく高価格帯でも中国の消費者に受け入れられており、日本勢の大きな脅威となっている」と指摘する。

ホンダも初展示

日本勢ではホンダが中国向けのＥＶの専門ブランド「ｅ：Ｎ（イーエヌ）」シリーズのプロトタイプ車2つを初めて展示した。日産自動車も独自のハイブリッド車（ＨＶ）技術「ｅパワー」を搭載したＨＶとして新型「シルフィ」を披露した。ただ周氏は「一度中国製ＥＶに慣れたドライバーが奪うのは難しくなる」と話す。

高価格帯でも中国ＥＶ企業がより一段と競争力を付ければ、後発組の日本勢などがシェアを奪うのは容易ではない。

（広州＝川上尚志、多部田俊輔、東京＝阿部晃太朗）

掲載日 2021年11月20日 日本経済新聞 朝刊 14ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。